湖月抄

はつ

乙巻

檜姫 宇治一 細

宇治十帖乃る。姫乃大臣三位が筆といふる説
あり。師説不用之。を故えん文章前よりうれり。紫式部が筆
にあらずといふる説なれども。是ハ継文章とゝうく時四代年七
十年後の事を書る故よきるよへ人の詞づかひなども不都
合なるもの多く紫代なり。ゆゑ。むこうとんをうく式部
の筆なるべし。孟一筆にめしたといふ説も面白し。然とい
へども一筆也。紫式部の説也。細宇治と
号しる事。花香に薫道雅のしりと知りたる有無
花相壷帝の八宮宇治より遁世ハ薫道雅のよしと。遊神
天皇の皇子ハ大鳥鶺のことゝ。宇治の薫道
雅のよしと春宮よりもうり。遊神を皇四十一年二月十八日
より輕鴻明宮より崩と。是大鳥鶺ハ父の御定めのごとく身
昇位のれとして難波より川筋をうへで身薫道雅のハ

兄より位よりつきたまへりしかれども三年すぎて
諸國の司(ミツキ)領地宇治と雅波とをゆづりて納めまうで時よ
りのちくゝしくせて玉ゑをかけてうれたく
てうて宇治山より陵(ミサキ)をつくり大鷄鳴(ウ)より位をゆづり八宮八條桂院より東
宮とまうし光義道雅をはじめ兄より位をゆづり八宮八條桂院より東宮
とこそうけたまはりしかどもかくて宇治よりのぼりたまふ
なりけるよ兄弟の事なれば為宇治(スウジ)卷(ト)略(細)記 薫の年よりつく
年記をつくるとよりて光源氏三十年の夫わり薫十
九歟より九一歟の名すぐのりみくさり巻名以歌号
之(コレヲ)

橋姫の巻

ぬり沙うこの巻一名優婆塞(ウバソク)義くびめ ひゝな濁(ヒ)一
註をむづかしくかれりこれ

その比世よりとまりてうれ給
くゝぬ古文 孟子の比相繼
卷の義強いづれこの巻時よ
りとせりで出抜く
細 古文七八の文ゝ巻文の
事第よりいとゞ出ぬかゝ
ゞよ彼紅葉の時よりかゝ
を大うゝ書おせうゝ巻
とりつゝ南代今上の御
時をうけるべし東文
みも立のふべきこと
しゝ
もちづうゝかり 師 朱雀
院御位の時東文をもて
ちう給べきこと申
時うりて 細 冷泉院東
文よ立ふうゝかり
仏徴殿の左右八代八文を
ちうしうんとしゝ
しゝ成給せざりゝて
中くゝそり仏法を
うりせざりうべしゝ
中くいとおうりゝ
師 東文なりとのうゝわ

そのうゝ世よりとぞまうれ給
かりうり 細 大臣の女の御帝
りのしゝ 細 八宮を宮ゝ
かりうゝ紙時うりて世中よりうゝ
のゝゆゝ
られ給
孟家司ゝ 師 兵八宮よりふせの人ゝ
ゝれうゝ
物ゝ
ゝうくゝ
ゝうつ世紙ゝ
くゝ八宮の北方ゝ
ゝ八宮の小方ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

つゆにうつる世のすがたをつくづくとながめられまほしく
釈迦のみがほとうるはしく　細　八宮
ハ宮
こと世かはれどあるさまにちぎりのあさ
つゆとうるさぐるうら世のすぐさまあよ
てうつくしきよまさるくあのこうつまへ
月と年ごろふるよりはるをものしるつぐ
うつもとるうるれいさうぐしく
つれづくなるぐさめよいでぬうら
んらごもがれとこやぞとうぐいえて
の絵クろよ絵づくしく女房のいとう
つくせなりひまれあてりこれをう
ぎりるくあくれとやひしづくみやく絵
よまうこうつぐうきたうてごの

ふんとそうぐうく　細　八宮
ゆかたとあるくるて
ゆうこあるくるうべうこうる
仰ものうきあるくはあよ
りてゆううべしこ
まそいうこびうこう
かうべし
うこうあるうあて
細工藤のくすせ浪りを
さしハ天とそうぐ流
わうとうく釈迦かどを
ふとそうぐうくあ数ハ
えせざうしくあ秀逸
のくすをゆしい像ふく

うびうく男うてもなどはりしうよれ
孟中君へ　平産うてハうこうふうこ
ふうこ海うてうこうあけし絵ふうこ
細世秀へ　孟八宮の歌のこ
うてうこううこひてうせるねみやあ
八宮心
ありうこつ
さ海しくはりそぐふあ
けていうてうこうこうこれこれ
かうう世るれどうすてうこ表ふう
人のはうう海うこうぐ海ようけうぐ絵
らうほうぐみくこうもうぐうこれひ
うこうりていうぐすう海ぐくもあ
うべうこれいうけうこうつうこうとひと
ふうこうぐうこうそんぐ恨ある男みく
いうこおこうぐうこうひとうこうべうこ事

とかくしうちて、猶いとゞけはしうゑ
姫君はいとゞゆづりひとへにすてのこし
こめんとはいふかくおもひ給ひつ
う月をかれば、そのくもりなげ海さり
姫君海うちのかくしうあくまかり
しうち明暮のはうずくさあるくその物
しぞ見しまふ姫君むすれ姫君しうを
はぞ御人ぐも、いぞやおうかしこう
くうどしらふやさぞふよいれてを
おかひゆかしぶらんれどうつらの海
みく何事を世すかりわすぶらし猶か
けしこれをいとはふらしと思ひて

のちはせん給し 細 中の君此君ともに給しうこうせまろとし之
そやおかし 細 いそ人はうへのとぞをうるしいそれをと人すとるかぞこし
さそりしこ云何し 孟 これゆへに小の君うせおふるそ折捨てをくなり
さうの君を 細 小方遺云なり此中君ともに

孝意し給へしとくさきの世のちぎりをしく玄の心し小方の中此久しうねお中君と産てわぶるくうせ給小母の笑も皆つしきれどお世の宿業によそとく
この君とし 抄 小此りこの遺云をおかしおて此中君をバ給ひてこえしく志あやうくど故よ母君のうせ給へるそつらそれどもいひとるしさ海のあわれなるく
いさりし 細 中君あるべしうりくるる之 孟中

此君は、べうてもよるそておかれしと指
をしづりとぞ一こしらん玄にさてと
う給それべさきの世のちぎりを給ら
さおりつるれど、さるべきにこそおり
けめと、いまだしもしまぞいと哀を
おそぶしろめでげるの給しをと給ぶ
しもつこの君をもいとられしうし
なり給ひてうらんまことにいとらく
しうゆ君さきざくのし給ひて、ひ人
君とふうろぞせきづらまうおりける
てうる笑もてすしをそそくこうろく
ここさ海ぞしおんぶいてそうくやんごと

えあるべし。文字のいと
いくせひあるなり
師ゐるべくいかさる
なく

わか君のおためて　中老
孟女子どもお君ふ　細　乳母
年のほどさんて
あらも人料どもえて
りはわかすまりせて並
まふく
それよつけゝる　細　下臈
よ付るる心懐さる堪
君の思ふって君の
ぬ人をと見ぶると

あまたあらいまありて、いづれをもと云ふ
よるひいつきまして召へ、どうるるぬこと
おかくし月よ君へて文のゝら物さび
しくのくかりまよりふつひし人も
うつきかなく心地とうよ。ええのびかへと。
つぶぶくよ君さひてもり出でちり川、わろ
君のはめれとも。さうさはこるよ。ろくく
志さ人をしもえりあへと海いさりまれば
涙とよつけゝるらうおさして地さかき
知にをまもてなうま名れどもぞゝや
ぞそぐてミしつるふよ。すぐるよひろくおり
ろうさ文のいけ山おどの氣色をぐらむら

ひめくしきこ　箋　棟梁
きよしうろ人をさこ物
の棟梁をとりおこなふ
人のうきとて

仏の御くさり　箋　見
より優婆塞と女の下地
よおいてあるへく

しよりつゝでいとひつそうあれはまそうとさう
まゝれとあゝあまかけいしかどもむしめく
しき人もすゝりるれべらゝつくろふひ
ともなさましよ草のゆやうまなぐり。
物のあはれぞあえりよあとゝあれる。
おりくよつけゝろ花よみどいのいろをも
いとも帰れじこゝろよこゝろやし給にこそ。
すぐさむことも世かりけれいとくしく
さびしくもりつゝむうるうさましよ持
仏の御ぐしおろし給ふて世給
て帰れをとるひ給うつろひしとを
りかくぼしめすまふひのはるくら

ころくなりつ
血汐などまゐらせんと
人のしるし師女ぐさ
のわすらどハおかしるを
れさま〜しぜの人めい
てくハ世のつまの人乃
やうまりくし

まふ侍しも　細　文帋
の別帳をくきとく
師々くの網ちかの方
よ別れのひしきてこそ
ハふびひろくも帰ぞされ
めくし
あらわれど　細　たちつこ
ととおろくし　寸紙縁
ゆとなど人ハやとよの
きたり

おしう、わがみるしもうるくしぎりけるか
らぎらりとゆがゆかしまつくろすかつ世の
人めつくいまさしもとのこうし月より
そくく世中とゆかりるすれつ、心ぐらりハ
ひぎりよたりそてあそて放蕩のさと結し
るすさハ例の人のさ衣なりうろぶへなど。
さらわれてもゆかしお結ハずらりやり心る
どら侍しもとり何くおのすしひハ、又世
まぶひまさやうよのここそハ好得ゆく
うめれど、おりふれハさのこやハ花世人よ
なずらふ侍んづつひなりすていとくと
ぐらしくろぎるさこやのくらも、どの

んづき　紙　ご簾などの
やうよ家の簾とそろ
へく置ることよしろく
仲ゝ扇の帰すきとおりく
えおそく勝るなしとう
もろく

づくりて有そうくわざりやとひとは
おぐさめして、なよくれとつきぐくろく
ゆくし、ご河ともおいよかれてゆかれど、
きらしめりれざりそら侍会とのひま
くよハ代家ぶらどりてあそびやくしく
おくけまくべことするりて碁もらへん
つくるおどくらもすさあそびわざよつけ
てもらうわざくとめ猿すり結ひ姫宮
へらろくもくかくとめりるようし結わり
家ハゆかとうよらりさけなりさ、破して、
りのづくしまうけもひいとうひらう
さ商ぐくよおそれ云のうらくろまう日り

池のおもにむれゐるをしどりつがひ　花　鴛鴦ハ雌雄はなれねバ一羽死ぬれバ今一羽も死也　杜子美詩ニ鴛鴦不独宿と作れバなにをいふのはなし方にはなれて鳥のつがひもはなれぬをいふ山しく只独く　細　ひとり住なれバ物毎に感ずる事もつくおもふ也つひはけるさこしく
師　人ゝこゝろにみし時もとぞ也　今ハつくもるみすかすもののとかなくうらもとて
細　うら公ひの中に爺二めふたらのこ八君がやどまどふてくらん水の宿のなまと打擲とそうらのに八鴨にそもかもゆりうん縦の世なりたりこ不定なる世中よなりの刹のあかい

げに池の鳥たのつがひうらやましく
つがひもなくてさえつがひにはなれつゝゐて
つゝおもいくゝことを絶しげど思ひ出るに
たきめぐらんもなくすがりまゐらせて
よ悲しげをとへたまへしげて
らいきうきもそてくるし
結ひの縁どもも衰よおかしくきこえ
べうきもきとろけまて
うらもそてつびきらめしきなれ
のこれ世よりきとられんよろづくし
ならやくめとしのびひかくらいとき
しげよおくしまとめならひ幸比のれいなき

不定が上の不定とはあり　師　かりの二八ゝあまた之　姫君きみのことをせうらずのみすてハ娘の世とよりかり方ハ只捨て世をさりあひてそそひめぎミハくとされらぐまりて法なつくしろうすよのなく立とそれろんとゑる優よてならりつく衰なりけりや　師　寺のなをうけくゑる物く姉君ふら母君なのこうをとひありなつくしなりや
けれん最哀く
あとのかへるあ
細　かりかとうちらけてハましまさうずとをひさみくさり
義姫君とうし法さ母のんをへるま
衣ときのあく
とりよハ　細　沙海よそて
より花の花に西にお他も
うかりきわ常の揚枝
もつうゆきりら常の家
行彼も文殊の眼之外鼓
眼ゐとり八この色とう
そて彼ゐと八屯之例
とりてよ物をうるなく
常家の御日記ふも彼の
曽よ不書とあり
暁おりのいさめなや

すひめやと浮らり絶よりれどさく
しとおそてよたる海めさそて宮の遁をとり
しづさ絶に二ろだへよなそもすの文
ぐゆきときまて志にけるさゆき海
いとろうしざすり姫君れにもどことや
とく部きしもそて作すしひのやうま
うさまぜま後れまうきまへ硯よはり
きつけざなりまくゝみすりまへハぞ
ぢしひてくさまよ

いとでうく　細　特志の方
たり。ゆかりよとられて、
伝ふ人とぬ
ぞ。也。仰下ひく長月
とひけて我おせのう
さ者縁とひろと
まぐ。ぐもづけ
盃サさ人、文字と書く
くゐれぐそり
うくも　細中の天乃
所八天のうまでは
菓子ぐ。盃八天
のうまよ。ぞ八菓の
中ゆくゆくんと
大和物語　ゆうこ人のをり
よぐみとりぐさと今
いとうるこのうまさ
ちと多のこはぐこひるなぐ
らさうそいなるひのこのう
やをりうるん
伝ぞどうるぞ
細八天のはんぐ伝を
衣裳ぐもうぐ
うぐ伝みうるん人

人長高
いとでうくをぐうけりぐし地ゆ
うさうるのうぐうとぞ
伝ようるね
細　まま地いあを
評してそり
とそのゆりい表ゆりうる
うてぐぐうくとでげ伝ゆるね行ゆう
八天内
わうぐ
ゆうるうるうげよ
中表高
うくくるねぐうこうすう
うれぐをゆりよをうぐうりけ
みをうぐ
うくうれぐ
して
細　まま地とうる
てそり
げうん。仰をうてよゆてげうる

さとんぐうーと地ゆとく
うるうとうるそよ　盃八天くに
さうぐとーる　細　伊琴訓
（伝ふて唱句しまうり
盃唱句の秘ゆ仰伝ゆ
ゆなり
又みうぐみと　盃八宮の
又母と　細　桐壺の帝よ
と母ゆ伝みをよく別
也伝ゆ伝こうも世中
のゆりうる海ともうるも
ゆり伝ゆぐうる
まうくうものるうよ　盃表高
ゆてうるエうて世をとゆも
うるうとうるとゆ八天ゆ八天高
ゆうれゆゆうてとうくう。
以天文治世以灯覚書
去去世中に住付よゆ地と
ゆうるでゆうくゆ世ゆうれて
もゆうひとうるて知ゆ八
ぬく　愚業抄の伝三角
ゆく

兎道稚郎子（ウジノワキイラツコ）　注に仰て諸典籍と勿多ふうとゆり
うぐ。ゆ。姫君よ。艶（ヒ）聖（ヒ）ゆ。ゆ君ゆ
うのゆ。ゆ。ぐ地ぐ地ゆうるれどうねよあ
うるせうるひるぐうるよゆうをあ
でいうくゆ世ゆうるゆどふも母ゆれ
みとうくとうれまでぐうぐゆうされうし
ゆうるのゆうりうるうるうるゆうれば
盃表高　ゆ八天ゆ八天ゆ
ゆうるうくゆるうるひ伝ゆどゆい
て世中よゆうるうれゆとうるいいぐう
ゆうゆ伝ゆうるゆ人ゆゆゆ中ゆと
ゆゆうゆうるうてよゆ地ゆうるゆ女のゆう
ゆゆうゆうれどうるゆ世のゆうゆ地れ

ゐかりがゆへ　細　八文の母こ大后の女ごにて后にたり此さうりしを云り
れてうとうかぐかり
孟　何も密物は皆よめて此手がの物がたりこ
うたづきのりの師　細　雅楽寮の楽人に
河　雅楽寮物師也職員令云雅楽寮頭一人乃至歌師四人儛師四人笛師二人唐國楽師十二人高麗楽師四人百濟楽師四人新羅楽師四人伎楽師一人腰鼓師二人以下略之
源氏のゆくへの　細　八文の事とい出せり花宴巻
ろきこ玄ざりうくこ云こ花家よ御く八文の京晶と書わらて作ら物語と作おなえてわらり次第たくきつでうるハ紫下よ大不もくるきこさ此を云

ゐがゆへの此そのかむなりやうやかし
孟　八文八子細もかきこ今狼ゆへすくし
つきすものもうりぬれどゆくゑもすく
かすうとをそくは出てうどかしどもかり
るんかごしうらくそゆほうらうらまり
孟　世のゆくれあれバすゑへも云すてゝ
きうしひそうしんよせなうひゝとろす
つれづうかうもまざつきのりの師し
どとおどやうのおぐれさるかとめしも世
つくそるきれわそびようろとられゆひ
細　京たとそり
ぞまれバそのさこハいとかしくもぐれ
さまてり源氏のゆくれ此ゆくうて八文
もぜん
とぞうてしと冷泉院の京文よおり
と　悪
ましとる朱雀院のゆか居のさとき

頭よおよ云八作ざ雨ゆりしう
ゆか后のとさ國よ　細　八文と京文うやく弘徽殿の大后息う中人まですくこ　孟　八
文とこき殿のとりうそく冷泉院とそうのうんとせしるの家よあり
かわつぶくよ　細　源氏の歎
歎だくうるなる世とあり
師源氏八御中よううね
とまずうや身のこしるか
ろしうぐそのうしるを
わらバ口れども多くまか
あくハこるよさしてられ
よる々うなるうし
又このとしせううひづらた
師世乃みも立まじつとか
さまうる文つかぬふかと
たゞわれぞうさくそ文
ひと云うすえねしとうり
ろみひ彼方よつの不の
細　京中よハ別こ文もお
まそぬく

海よゆかりうまへてこの名を世中にさら
つぎまぐくりか此しさりそてりしつさまり
細　源氏方とそう　孟　云
給ひるさるさまるおいうてもおもさく海の
の御手く
此うまうらひゆはざしもるまれ多りゑれど
いよくのはつぎくよるうりくそぬる世
まそえまじらひ給ひず又この年比う
おひじりまよかうらそく今へうぶりとよ
ろ所を此かりもそてうかうら福よずとと
八文の京の家燒失せしと
給文やけよぐらいうとしき世よおさまし
うあへゐすくて所ろひすゝまへづき不のまろ

あじろのけはひちかく　網代ハ宇治田上川などにて氷魚をとる物也八宮の山荘ハ網代のちかくなり
[illegible]
しづかなる思ひにかなはぬ [illegible]
[illegible]
師 閑居の [illegible]
[illegible]
[illegible]

花もみぢ　細 [illegible]

昔の人　孟 北の方 [illegible]

ところもなかりければ宇治といふところによ
しある山里もちたまへりけるにわたり給ふ。
おもひすてたまへる世なれど今はとすみはなれ
なんを哀におぼさる。あじろのけはひちかく
みゝかしかましき川のほとりにてしづかなる
おもひにかなはぬかたもあれどいかゞはせん
花もみぢ水のながれにも心をやるかた
よりによせていとゞしくながめ給ふよりほか
のこともなし。かくたえこもりぬる野山の末
にもむかしの人ものし給はましかばとおもひ
出きこえぬおりなかりけり
見し人も宿もけぶりとなりにしをなにと

[illegible]
[illegible]
孟 六條院 [illegible]
[illegible]
[illegible]
喜撰 [illegible]
[illegible]
或書云 [illegible] 喜撰 [illegible]
[illegible] 得仙道 [illegible]
冷泉院御宇永承七年
[illegible] 別業
[illegible] 寺 [illegible]
[illegible] 悲哀知識 [illegible]
の西門徒を補せし
[illegible]

て我身のきえのこりけんいけるかひなく
ぞおぼしこがるゝや。いとゞ山かさなれる御すみかに
たづねまゐる人なし。あやしき
げすなどゐなかびたる山がつどもばかり
まれになれまゐりつかうまつる。峯のあさ
ぎりはるゝおりなくてあかしくらし給
ふにこの宇治山にひじりだちたるあざり
すみけり。ざえいとかしこくて世のおぼえ
もかろからねどおさ〳〵おほやけごと
にも出つかへずこもりゐたるにこの宮
のかくちかき程にすみ給ひてさびしき
御さまにたふときわざをせさせ給つゝ

年比 細 八文もとともう
らさ堂ずし由をとふ身も
りてわきひき法文の深
きをうかうるみとと云さ吟
せなりて
公えらうハ 阿 極楽國土
有七寶池八功徳水満其
中池底純以金沙布地
池中蓮華大如車輪
捨さて人もあむあとうふ
とふ人のもらうすの上のの
かくねハすし 空也上人

下むしろて社浴しのふ
文の罪障まんげのわらへ
冷泉院みもちくさく
細 斎ことやけことかも
わつ人ハをとめつろえ和哥
むきこうの公信よハをさう
りずくし時く説へハまい
ならるへし

法文ねじとしてらしひまへハさうとんし
嘆きしてつねよまつり年比まるびとち
まくるこしぢものゝうきこてろとをえて
今せまりてよく此世のうもそめつよわら
さかにし後世をもしそれがらくらり
いりらそのゝ人よ云ひのがりよぢうあき
池みとしをえぬ人をそ後にしくかさかなり
人ごとゝすてんとまん果てさそうりよ
すんえ初てさらよりすらをもへねるど
へでそえすく物語し給ふのあざらは冷泉院
みもちうしくまつひて此頃ぞれど左し
へきとゆう人すりうらん京よ出てらつねて

まふさそそくまれまさる
人とや
此文のくゞ云きみ事し給ふ
をおせまり仏縁わりて
まれまるゝやとしく
いるふくさらハ人きりまや
俗ひしりとう 盃 えとしう
冷の所翔く 俗聖之河浄
名居士身在家心出家
ふ云俗形して戒行を持
もうろ人く四部弟子の中
に優婆塞是也 唐から
龐居士をくいるしてみろく
此執わしく声聞ハ出
家を十池以上八年二至
僧也 天東坡山谷なとも
うろく有髪僧在家出
家をく詩みも仏とり
宰相中将 細 昔く十九策
の風ろるへし 紅梅巻乃

よ寺りて世いのさうべきかまおりてはちし人
ぐそをせ給へともあうつみそよ八宗
のいとしてるいけつの法ざえさとう
うく聴し給ふうれさるべきそ生れ
つる人やまのしうんかわつて云ハを海
し海する湖ど海しのひぢりのそさそ
よるんと給とをても いまださらかハ人
まえ後や俗ひじりとかこのまことゝ人ぞ
のつけしぞうり義ならことたりみどの給
りと宰相の中将をは親よまふしひまそ
我こそ世中をいとをま海 知りひじり
ありしとこまひるへ人をはめしくゑしむくく

此かく 御是ハ薫十九巣のこしらへしやう口伝（かくし）ひ給ふとこゝろせかりしとぞかり弐一
巣の千月までのうち此書よハえらまれ行酒の書しに紅梅かよハ中紐えのうしろ見え給ふされども
書しるしたる段のごとくなり
紙にこそせおーを 御書のみて柏木の書院とも吊らうぢやのみうら道心のまへむかあり

こゝろとめ
つとめうることを事よ
と給ふうへし
お家のうろうし
そのたそくうくえ師ハ文流
子を立え是ハうの冷泉院
のいまうこうらハくゑ
やしのまろる事ゑ
（江 深窓の）

こゝまうよ物のさきめぐる
御世上のあをとぞらけて
されうる聖られけると
いふなく

げうハ川とめぞうらあしうそしらべうされ
さぐ人さられどもひつゝぞくみぞしうひあり（八宮の子をゆかりし）
よなら給ふこゝろのとうそやいうふしさう
とどめてこうう給ふ出家のこゝろざしかたくよ（細り子の御志そめ之）
子を抱ききろうをとろうすこゝしるよ是ひとごこ
かりの宮しかりていふづうしき女子ども
の御色とえおりひとてぬしる人ふげ
さ給りまふとこうすきとてうまりの巻（おかぎ給りふ）（に）
めづらかぎりぬくげかなくごこの姫君さ（細聖の給ふし）
ちのことひさわくをてあそびあ人家酒

柏木かりしひつまし
薫柏木寺産の菩薩乃
よふとみてく
法門がくさうまうして
孟政号の段ありれども云
よ院の帝とふるこゝみ
左
まうひきらのわくらうに
八宮のおひをめくらうの事
にまうるのまうるとくにうると
くりんとさへせがをし
十のみつみそ
細冷泉院の注よ書之乗
文の御中に之 師上面よ
さうしもとく出んかびには
年ごとゆかせらうしう有く
朱雀院の 細 院の御事之
入道の宮のとかしと云女
三宮を源よ嫁せ給ふ
ごとくかくし

院よさくとひて内々給うハいつとかりしろく
柏木かりひやしれ給うやしこゝいよめぐ（致古代きるめしここえ）
出ば法門御くさまそさうひぢうれあさ（孟冷勅定之）
まるよせひ出てくごの世かうさご内へさとく
しうりんとぞそうしるあくて出かうしの
こゝやうきうろあくさひとそのうちうちそ
さづうひあらんとりさづうしもぞされん
給はどもゆかりやへしあふぬあるとその給（御ゆかりまでとし 孟姫君の宣と冷へもつてせられし定）
いまうこの院乃みうどいは十のことよぞ出え
しれうすくう院の紅六条院のおづけき（源氏こし）
こしまし入道のゑや乃御あしとかりし（十三之）
いそうの恵さらとぞふつまゞくさうるあそ

なか〳〵みこの
細 薫の心に出家ある故
八宮の御心ゆかしく思へる也

世をいとふ　細　冷泉院の世
をいとひ給ふ御心の山に
かよへども八宮の御方より
隔て給ふと也　孟
京にて世をのがれ給ひなば
とかくへだてもあらじを其世の人
おもひなし給ふかと也
しかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり
といふ哥によりてうぢ山にかけたり

びんなきことにおぼしける。中将の君（薫）
なか〳〵みこ（八）のおもひすましたまへらん御心
ばへを対面（たいめん）してみたてまつらばやとおもふ
心ぞふかくなりぬる。さてあざりのかへり
いるにもかならずまうでてものならひきこ（薫の詞）
ゆべくまづうち〳〵にもけしき給はり
給へなどかたらひ給ふ。みかどは御ことつてにて（冷泉より八宮へ）
哀なる御すまゐを人づてにきく
ことなどきこえ給うて（冷泉院の心）
（孟 冷の御哥 八宮の御かたへ）世をいとふ心は山にかよへども八重
たつ雲をきみやへだつる。あざりこの御つかひを
さきにたてゝ、かの宮にまゐりぬ。なのめなる（八宮へ）

てきやつかさとりてくさ
かくとめる所
にかへりて　細　聖の事を
いひ侍りて御ことづてを
きこえ給ふ也
世をうぢ山と
にきゝて　細　喜撰法師
わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり
よりて八宮の御心のすむ
とはなけれどもうき世
をのがれて山に住給ふ　孟
八宮の心も世をのがれ
たるこゝろにはあらねども
うぢ山にやどりしとかや
ひじりの方を　細　八宮ハ
俗ながら聖のやうに
申すを御ひげして
とかくのたまふ

きはのさるべき人のつかひだにまれなる
山かげに、いとめづらしくまちよろこび
給ひて、所につけたるさかななどして
さるかたにもてはやし給ふ。御返し
（孟 八宮御返哥　冷の御使をさし）
あとたえて心すむとはなけれども世を
うぢ山にやどをこそかれ。ひじりのかたをば
ひげしてきこえなし給へれば、なほ世に
うらみのこりけると、いとほしく御覧ず。あざり
中将（薫のこゝろざしを八宮へかたりし）のだうしんふかげにものし給ふなど
かたりきこえて、法文（薫の心ざしを 孟 聖の詞）などの心えまほ
しき心ざしなん、いはけなかりしよ
はひよりふかく思ひながら、えさらず世（雖未出家心ざし深し）

謙の方を卑下し給ふ。
次の歌は八しうの作事
に立て我根の詞にし
ええすーまふとし
世の中をそむきがたふる
らんも あさき人の法文
などよむをりてハ遁世
なさしてん人の物もんも
さーて捨るべきまなあら
ねどもとし
とあつしくちし海と
世人の物ちくを捨らば
とえども捨るさ世まそ
ハ解無あるしとし
いとありがたき御法を
八文の法わうき海をわざ
いまにさてうらとえ
給ん法より給しへなど
孟 善の口ふうしるを
へ文へわざらのしと

あらるほどに地はやけまさりしよいに海
なくおけらしわざしもそびこえりらく
法文とこ
すらひまし出からくさろくもあら 善の卑下の詞を…の…なし
ぬ身みしも世中をそむきがたふらんよ
くらぐさまあらねどものづくしらち
しあそまゞうつくそてるんをぐうるを。
いとありがたき御法をうけ給りつ
くふしらうくこころはけてうんべきを
ひきまする。などて浮んでろよ中給しあ 孟 八文之 細 八文の詞
くらきて無文世中をりそめれとく
物あひらいいとをしさこころのつさそ
むらことをけび身よられへある时あるへ

ての世とらるめしう出ちらちぐめあり 細 因縁あるしハ…
てるんぞうちんもとうろわざるなりを
ど。来わく世中ちよりるひなにご 孟 善のまよく
とあぬこと八あらじと物得ゆる身 孟 あるも不足…
の程とよさちさ後世とさんぐらもり のちのよ
浮んがありがたきてみはさべきつや。
さといひそれらとこうとさうに給る
どのもとめ物りむけ給やうなりる緣よ
て。ものづくしこそ出州るる物ひのあ
ひゆけどのうりもくやさん給るうよ。 八文の法…
そらぐあてるとわくしでるあべりあるとさ
しうりも無さうるよえさぞう亦るすく

うゆはさんべきるや
細 八文の法身はさるべき
こそ仏のもとめある
やうなる世のうささそ
こそうくいとひめれと
し 孟 さんべきるやさる
べきうやしぶ方にとそれ
焼亡よあひあらして世
と出くやうよなる八仏
の法もとめくし
さしうこめ未詳しくるよ
佛生々ハ生始ヲ不知死々不
死終ヲ不知と云へし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あぐれどもんもとにさ
ぐひて　細あぐれハ法
く　孟法文をちそ　ま
つてうるのうとと
せハあさやうろと
業のかく
うぐそくあぐしとこる
山の　孟僧形ぐ
法文をうと優婆塞
いうく　うくそく
をこをふ山の推ぐり
あるそぐくし底ま
あしねば
てうくのさまひをれ
八文のうひさうせをふと
業のかく　細業のかうう
仰光ふうひうう八宮の法文の業
かをうるひうう事をふ
づけまふ
をうくの僧形
仰宿法とハ徳のうう
ううく労の修ぐうう
く宿光ぐづいふも同
しかく

多ぐうづうとうら出あぐれどもんも
うようぐひてやなぐ出ひくーて
八文のうやのうあうう海のいと表ろうと祈ん
づうようひまうきひさびくうろ
絡つ出ひしやうようばうくるぐう
とこをふ山のううさん法文などわぐと
上麓の高げ出ひあうでいとうくの絡ー
らひぐうじうんぐえあう法ーうぐ
ハ世よ出ひれどあまうこはくううけ
ど紙げうう志ううくの僧形僧西のう
うく世よいうう海ぐうくうすうて猫の
ふとうひあういうんもうどくうく美

よの人をうぬ　細形猫お
戒の人をうく
こううけよ　細孟尊
孟仏ぐげく　仰僧よれ
りひやうけ紀とを尊
ううとうひううけう

えう絡文そのの人をうぬ仏のはでーのい
ひうをうりうぐうりの　孟仏のうまうく
までけうひいやうくうとうげうそごち
うげよりのうれういうりのうくてひ
子ハ出やけぐうよいう海うくうぐう
つううやううひのうぐけううう出
絡ぐうくうよりうひ絡ぬひいい
とうくすうよりれうくうひ絡ぬい
八宮のうをうを絡ぬ　孟経譬喩うう
いうあてようう出ひうくうぐうしのうある絡
まひひううう出ひうくうぐうしのうくもかうぐれのはを
しへをもうくうぐうくうひよひう　孟まを
いうくようくうう出ひうくうあ絡ある

けうくうう出絡ぐうくうぐう
ううれて
うて寝ぐうう法文を
世をふぐうくうよハうぐ
ひやうく同世をうんうの
ぐく

[illegible]人〻 細 [illegible]花
[illegible]の義用之 花[illegible]人
ハ貴き人〻[illegible]
[illegible]
[illegible]

八のあること　細　宇治橋
南門の橋なるの名ことに
宇治橋と孝徳天皇大
化元年西年業造ぶ
橋なり　仲橋のこと
どをいつぐ出なるこころそ
の姫橋なり
宇治の中を　細　一説流
き野中とこころ不用と
歌本の中をとこころもむし

びてはくるよ人をどもとくやうれて侍
よ蓋の歌
しるし河のこるこるれば舟をどもまど
らくでは馬よてかりそうつてゆく
すくよこうかてごうてこうをこぬ志
げ本の中をとけるよいこわこまり
こ風のこをとひよはろくこはらこぞて
本の歌の歌ちちうこうをいやこうは
歌流よ蓋の
ひこやつるこびいてくぬれこねこうわ
こるこをはこくこうひこ海こぬ
うこうよこうこはこくあこくこれ
をり
蓋
やまこうこれこぬ本のこれ歌こうを

の紅葉の日よこう
てすうくぬゆく紅葉
ざこれ
このこうこ　晩　家ここの歌のう
こをとれこ宇治こ仲下の
仲よあのこれこれこれこ八月
歌の歌ここ山里は海
ゆここここここここ
ぬれ秋の中よこうぬこ
けこここまこを
仲ぶこうこ家ここ八蓋
の白ひを中て作こをう
こうこぞぶこうこ
こ

わやこくこうこ紅葉これ山川のお
こうこもこうこここここ
せここぞここのこれこを
こここここ紅葉ここ弱の
あこここここここここ
るここれこ白ひこ海ここひこ
ここぬここねこあの歌ここ
ゆこここここここここ
ここここここここここ
ここわこれぬこのこねここここひこ
こ蓋の
ここねここあここここここここ
こここここここここ
こここここここここ

琴琵琶のこゑのをしくさとりをつくるへハ琵琶のこゑのひくさとりを
ものわすれとあり琵琵と
世を定まるなり
わうしきでう 細 海よ
ふくしきでう 細 此黄鐘調と
笛の黄鐘調ハ比巴の風香
調ハ比巴の黄鐘調よハあ
らぬハ比巴ハ風香調及
風香調秘曲あり楊真操
流泉曲也仍以此両調ヲ
為先ト比巴の黄鐘調ハ笛
の平調よりあいもとく掃部
頭貞敏四調と定めり
風香調ハ合笛黄鐘調及風
香ハ合笛越調双調ト黄鐘調
ハ合笛平調ニ清調ハ合笛平
調盤渉調ト是也下畧
ちのこと表よ 細 を
ケうよ陽のくうこゑ
くに伊第ハ琵琶より金
ハきごうすぬしや
ちうくうこうこうり 細 帝王
の人乃ちうこ盃に会伝り

琵琵琶ハ琴のこゑのひくさとりを
つくるへハ琴のこゑのをしくさとりを
ものわすれとあり琵琵と
世を定まるなり
わうしきでう 細 海よ
ふくしきでう 細 此黄鐘調と
笛の黄鐘調ハ比巴の風香
調ハ比巴の黄鐘調よハあ
らぬハ比巴ハ風香調及
風香調秘曲あり楊真操
流泉曲也仍以此両調ヲ
為先ト比巴の黄鐘調ハ笛
の平調よりあいもとく掃部
頭貞敏四調と定めり
風香調ハ合笛黄鐘調及風
香ハ合笛越調双調ト黄鐘調
ハ合笛平調ニ清調ハ合笛平
調盤渉調ト是也下畧
ちのこと表よ 細 を
ケうよ陽のくうこゑ
くに伊第ハ琵琵より金
ハきごうすぬしや
ちうくうこうこうり 細 帝王
の人乃ちうこ盃に会伝り

琵琵琶ハ琴のこゑのひくさとりを
つくるへハ琴のこゑのをしくさとりを
ものわすれとあり琵琵と
世を定まるなり
わうしきでう 細 海よ
ふくしきでう 細 此黄鐘調と
笛の黄鐘調ハ比巴の風香
調ハ比巴の黄鐘調よハあ
らぬハ比巴ハ風香調及
風香調秘曲あり楊真操
流泉曲也仍以此両調ヲ
為先ト比巴の黄鐘調ハ笛
の平調よりあいもとく掃部
頭貞敏四調と定めり
風香調ハ合笛黄鐘調及風
香ハ合笛越調双調ト黄鐘調
ハ合笛平調ニ清調ハ合笛平
調盤渉調ト是也下畧
ちのこと表よ 細 を
ケうよ陽のくうこゑ
くに伊第ハ琵琵より金
ハきごうすぬしや
ちうくうこうこうり 細 帝王
の人乃ちうこ盃に会伝り

琵琵琶ハ琴のこゑのひくさとりを
つくるへハ琴のこゑのをしくさとりを
ものわすれとあり琵琵と
世を定まるなり
わうしきでう 細 海よ
ふくしきでう 細 此黄鐘調と
笛の黄鐘調ハ比巴の風香
調ハ比巴の黄鐘調よハあ
らぬハ比巴ハ風香調及
風香調秘曲あり楊真操
流泉曲也仍以此両調ヲ
為先ト比巴の黄鐘調ハ笛
の平調よりあいもとく掃部
頭貞敏四調と定めり
風香調ハ合笛黄鐘調及風
香ハ合笛越調双調ト黄鐘調
ハ合笛平調ニ清調ハ合笛平
調盤渉調ト是也下畧
ちのこと表よ 細 を
ケうよ陽のくうこゑ
くに伊第ハ琵琵より金
ハきごうすぬしや
ちうくうこうこうり 細 帝王
の人乃ちうこ盃に会伝り

琵琵琶ハ琴のこゑのひくさとりを
つくるへハ琴のこゑのをしくさとりを
ものわすれとあり琵琵と
世を定まるなり
わうしきでう 細 海よ
ふくしきでう 細 此黄鐘調と
笛の黄鐘調ハ比巴の風香
調ハ比巴の黄鐘調よハあ
らぬハ比巴ハ風香調及
風香調秘曲あり楊真操
流泉曲也仍以此両調ヲ
為先ト比巴の黄鐘調ハ笛
の平調よりあいもとく掃部
頭貞敏四調と定めり
風香調ハ合笛黄鐘調及風
香ハ合笛越調双調ト黄鐘調
ハ合笛平調ニ清調ハ合笛平
調盤渉調ト是也下畧
ちのこと表よ 細 を
ケうよ陽のくうこゑ
くに伊第ハ琵琵より金
ハきごうすぬしや
ちうくうこうこうり 細 帝王
の人乃ちうこ盃に会伝り

すくはりあれば（細ひとしなの人の句）ひとこゑぬ間はあけくれ
くるんあそびせど（孟東ちりとあれば千人すませる意）ものくるしや
このうちのもりうちまで名人作りと
さへぎりとしたるもの（孟ものうし）
（孟八文の内ひけとし）えしつかつ
うぐくのひとこゑもうせもてどしたる（細蓋の句）
の結いをうちもとばうちうしひてあらじ
さかりさけりのうちのうちのびの結
ものどもれ人をうさせのうちよりう
出べうをしたるのまてやうれうべとよ秋い
もうぐうちうもうちうもうちうもうちうぞく
ておりうまうんれうまう海のあやしく

（細ひとしなの人の句）
（孟ひとしなの人の句）
（孟ものうし）
（細蓋の句）
（孟東ちりとあれば千人すませる意）

げようべてうはやしまうねうすりとこまやう
うのまへどおおしこんうさやうよ姫
れうちとうやし（孟ひとしなの人の句）
のうちうやし（細うるの人の句）
ハうしけのそいびしこめてうれうべそこ
とうれうとうそやれ出うれと
りの人をみしのうちよしびとうてこの夜
ねべのへうまうおうまうよのうべうめうを
いびいのうとをとうとうあけてうまうべ
（孟うべく）
（孟うべうのうを）
用はうしうはどうようしうれうをるべめ
てをべれををうみびうくまうあびくべで
ねうちをのうよいてうむびよ為はうく
うへどうりうひとうはうはうべうを海う

（細ひとしなの人の句）
（孟ひとしなの人の句）
（孟ものうし）
（細蓋の句）
（孟東ちりとあれば千人すませる意）

あつさのあして
仲琵琶の撥の形まこと
ごとよ仲これハ女ハ伝
いとく月ハ光しくも
招きつゝとゝろ指月
とゝ熟なもあるゝや
伝云月隈重山撃扇喩
又云水原より月を
みくりゝ伝あり不用之
又云後漢俗説曰物語の
以扇招月を伝
よ弱くれゝよ伝を
天仮日基長て漢
よありゝく俗云細流
よハ用ひるつと

いろ日を見を　細中君の
詞おれゝ
こゝく奥入墨流
王とのやゝ
くよ撥く日を年
よゝ
編ハ知史記魯陽以戈
廻落日　私左傳元仲これハ

魯陽と云ふ戦場みて
日言めりよ行とみて日
とまゝこゝよ三天半
日のゝりとゝ
撥とゝ
ゝや
細山抜
ゝ入日とゝ撥
細
琵琶の隈月よ撥
ゝ
琵琶の撥と
隈月
撥手の上よあり李嬌
琵琶詩曰半月分絃上
細
ゝ
ゝ
ゝ

の文付ばかりなりみくるくるくるくるや月四三月ばかりさだれば春今夏姫夏又冬を書あげ
く琴ばかり引合をあそびまつくあり
こうもあるくばかりくんとよくくるくるくるくる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ぶてんの者大納言
細川梅の花乃ゝもせ
師行梅の花ぐゝ行源寒
みゝくゝ花ゝ成まふこ
れをゝ乃ゝ乃ゝ

ゝ行ゝ
細ゝ中ゝ年ゝ行ゝ
ゝ師業
いまた業ゝ行ゝ
故侍大納言　師梅の
也ゝ中ゝ年ゝ毋ゝ
女之文ゝ行ゝ
ゝ行ゝ

ぶゝゝ者ゝ大ゝ納ゝ言ゝ細ゝ川ゝ梅ゝ花ゝ乃ゝ乃ゝ師ゝ行ゝ源ゝ寒ゝ
みゝくゝ花ゝ成ゝ
れゝをゝ乃ゝ乃ゝ

ゝ行ゝ
細ゝ中ゝ年ゝ行ゝ
ゝ師業
いまた業ゝ行ゝ
故侍大納言　師梅の
也ゝ中ゝ年ゝ毋ゝ
女之文ゝ行ゝ
ゝ行ゝ

人ゝ乃ゝ行ゝ
舞ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ
しゝ

梅ゝ
ゝ梅ゝ
て　梅ゝ
ゝ
しゝ

ゝ行ゝ
ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ
ゝ
ゝ

ゝ行ゝ
ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ
ゝ
ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

わかの人さうなりけれとひとも…こゑ
河野 和名 永更 元内膳
司式之山城国近江国氷
更 細代各一廻 其更始九
月 近十二月廿日 供之
今年近江の田上のわかの
より れうの水更を山城
の宇治 [illegible]
れを [illegible]
[illegible]
[illegible]
[

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

孟松風八次琴にとりてをしの音は琴の音風のまつ〳〵いづれの作にか
ゆくまつ一入の感あるかな
〳〵

はつこうこんかうまでさけとすりうこんかうまでさけとすりうこんかうまでさけとすり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

くんこのめでめよとぶみもらのこと
とさぶうまのもとをきてわんじつるを
じみやうくゆゑんのやうよあるうきぐさ
つまとぶがくぬつぐよをつけたん
とぶがとよをすぐさぐ絶ぐさうろ
きうの蓋の舟よのうつ泊
きそもくそのよれんをうろうろ人をの
うるまつうるうるぬがづうよをとぶっ
しうをぶがゆうこのをらよ枕くい
ひつうつうぐひやまこもあうんと
ぐうるけくも少メをばざりけうをの
まぐぶ泊浪と舟とをるうらてをうる
人ぶぐひとこをくもみをと人ぶ

細舟舟の蓋の泊盃人よりもすくあ人半かうと

代くらひつうう
細蓋舟の蓋よ同縁有
せをうをう人のあうみよ
しし伊女三と柏木の
中のうをと

うのぬくのよつを
細柏木の乳と伊柏木八
月よ付ををひわうをと

らひびぶぐをぐくうのをぬ
をうをぬ月の泊ぐよ泊れぐよ泊ぬるの
清ぐげをつをぬうて伊うぐをのづ
らりのぐ泊をぐをとをりうをうう
女三の泊をぐ

柏木のぬよ忘あもう泊ぬるの時ぐ
泊ぬりあをうぐ泊ぬりる時ぐを
伊舟をと泊浪をのを
ぬうりの中よるんぐ海をの泊せうを
このうをひと伊ぐをうをいををれぐく
をうををぬ今をのぐらめよな
柏木のまぬうを

つをあをいをくうの泊ををうの伊ををう
舟うを月をうを月よいををうぐ而うをぐいぐせををみをうを
て妻入り伊入ををを今ををををををめをつをぐ
つをぐいぐをうをうをうをうををめをつをぐ
泊ふしありし泊
をうぐをうをうをぬ今ぐをのついでる

仏は世をかつてまもりたり
伝といへるは世をあれば
しるべは教ひのうえ
とかたり
ゆうをとくとくさわも
業をよくとくさわもあ
るべし 柏木のえのもと

この文ここうもも
八文のうえ業のゆかの所
とかあり・うつくし

と申りひとつ人つうれ伝は世をかつて
そうとうん申ふえもりあるはうんぜき
をべさりのを作り今は行くやさも拙
作うんく羽のえとうぬ多ばら
もて作るはゆうをやとこそいて
うろめくやまれどこの文ふうは
を時ぐりのめを作をまちつぐをり
しうは・すこしのりくうりりや
と念じ作りつくり出そうでこそ
うんさをうれいこの世のことを作り
じくるくうは海のよ出れ作るの
こもうゆやしつゆもしのうあ

嫌カ物語

見ハ常世の常編ものしとく

業の誕生のこと

細柏木のこと

後こうもこうこうこ
細柏木の後衣よ宮母
の服とうこねうこ
こにうこ
細弁と書とせ人あり
こここ大業小武をと
よ具て行こうや
人とこうこうこう
西こうこうて弁
とこばうてこしまで
ゆこここ

業弁の母こ柏木の乳母く
詐ヲリコツ
弁をうれゆここうこ
細西玉男てうし

作しさつこよ母よ作人はやこく病
つこて作ほりんをこれ作りあしうば
いくぐやひこんちづこ藤ごろもこう
こねれしここととひまこ作よ
こうこうこうこぬ人のこうとつけ
こうこ作りけうぐ人をこうごうてよしう
こうはこうこうこうこうこうこ
海のこうこうこうこうこうこ
ばこのこうこんあこうこえこのんこう
作作弁うまこうこと作りはすこせあこう
こくうんあこうこね世のこうこくこうこの
ぐうこうこうこうこのこうこうこ
こうこうこうこうこうこうこ

此文は文方につここ
細姫君と釈れこ 詐弁
尼がうこ左弁弁は宮治
文のわ方乃母このか
ぐうこう

まつの花の女郎
細殿仕人目の女・梅木の
いりくしくし作 弘徽殿
女

みぶくれの 作 中宮の
御とりて入り盃入
ちこそうやまぐれのく
ら木なれんに菊よりき
べうりうん

まつの時ぬ
細殿 ことを拾給して釈
とりぬ入て御のこと
とり

いうこ世よまでうづべさ海みを作くぬ
を、冷泉の無ぢのいりくしくし作
苦うこうれをりしまとうめくまり
しうづく作ごうどつうくさて作て
えこ出作でみぶくれの梅木よりう
くく作うたら小作作ていりうせ作
よせんそのうこのうざうくく作
人いうどすくうたら作まろ未の世よ
ぬりくのの人よとうく命どうくく結
へくこそさすがよめぐしひ作れなど
くこゆう作よきいのあけこそぬうし
くくいこの芳拾いつきうづうんあう

作作とうびしく人い
赤ゆふ作作がうと同
芸くく蓋の云歌のにう
せくくくく
うう野面うくく
弁よ作ひと御くう梅
く梅木の作とも弁ぶ梅
給ててくくゆうう人
こうくく文又の作木を
ぬうでつくくうくく人と
こくやうう 盃 細く 詩在
仙窟 うくくきくう
元
市まくくみうく 細 蓋のお
まくくく焼抜ふてとひ
しうり盃 女三文乃
市まくくみうく焼抜ふ人
抜、生べくくうくく 作細
梅木の海抜の用く 作細
盃女法く細市抜作まくく
ううの世文くく弁う用
盃の市抜くくく弁まくくく
ふ り梅木の用うくく
抜抜つくくうくく細梅木

ぬぶくくうぬうやうくくくくくくく
えんぬ作とうひしくくのよれ
ぶゆうくいくくくくくくくくく
みや織よむひとやくくうくくみ
んくくく作くくくくくくくくく
月みくくくめぐうくくくの作さく
やうよくくくくくくくくくくく
うびくくれをうくうよあくくれうと
弁の蓋よまつくくくくくくくく
抜抜いくくくくくくくくくくく
りの作くくくくくくくくくくく
弁よ梅木のくくくくくくくくく
抜くくくくくくくくくくくくく

[illegible]

細西海道にとりしこと私の想ふこと仰せ出でられの想ふこと仰せ出でられの別のことをつゆあらばそれを作人なりの想ふこと

細　のみ　[illegible]　仰せ

いかるとぞ[illegible]と仰せ[illegible]て仕文

[illegible]　仰せ　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]